

宮柁二と新美南吉（下）

鈴木 竹志

前回の最後に、宮柁二が新美南吉の「囊」と題する詩を紹介しつつ、南吉の人柄などを語った「私の愛する人生詩」全文を紹介したが、私は、この文章を読んで、文章家としての宮柁二についても、もっと評価されてしかるべきではないかと思うようになった。

この文章には、青春のある一時期、文学への強い志を抱く者同士で熱く語り合った新美南吉とその詩に対する、宮柁二の思いが、単なる懐かしさというよりも、南吉の人柄、そして文学的資質への共感が溢れているのである。この文章に巡り会えたことを、私は本当に嬉しく思っている。教員生活に入ると同時にコスモス短歌会に入会し、その後宮柁二門下という意識を常に抱いて作歌に努めてきたが、その要としての宮柁二という歌人が、若き日にわが郷土の優れた童話作家である新美南吉と交流があり、南吉の死後も若き日の交流を大切に思っていることは、心底嬉しいのである。

宮柁二が南吉について書いた文章は、実はもう一編ある。それが牧書店版『新美南吉全集』の付録として付けられた「新美南吉研究」の第一号に掲載されている「上高田時代のこと」と題する文章である。こちらは、編集者の巽聖歌が宮

柁二に依頼して書いてもらった文章である。もちろん、この文章も『宮柁二集』に収められていないし、別巻の「著作年表」に記されていない。この文章も全文を紹介する。

上高田時代のこと

新美くんと私の二人は、年齢が近かったから親しかった。何を喋らなくとも、親しい気分だった。交際は昭和八年ごろからだだが、彼が病を得て帰郷する昭和十一年までの間、最もひんぱんに会っていたのは、昭和八、九年のころだったと思う。年齢で言えばお互い二十二、三歳前後ということになるが、私の方が一歳上だった。

私の方が一歳上だといっても、気分ではなんとなく彼の方が年長者のように思えた。

二人が親しくなったのには、巽聖歌氏の介添えがあった。彼は私より一年早く地方から上京しており、上京前から巽氏に兄事していた。私はどちらもそれより後で、新美君が年長者に思えるというのは、そういう事情があった。二人は巽氏の家でよく一緒したが、巽氏の留守中でも勝手に上がりこんで、自分の家のように寝転がって話をし合ったりした。

巽夫人の方を、実は私は所縁あつてお二人が結婚される前から、つまり新美君よりは早く存じ上げていたのではなかったらうか。その巽夫妻に対して新美君の戯文がある。写してみれば、こうである。

巽聖歌氏・風邪で扁桃腺をいためられたさうで親しく口をきいては下さらなかつた。枕元にあつた原稿用紙をとつて何やら書いて私に示されたのを見ると「お家流童謡といふのを創始するつもりだ」とあつた。大へん勇ましいことであると思つた。氏が含嗽している隙をぬすんで原稿用紙の裏を見ると、奥さまとなさつた筆談の痕跡がみとめられた。中から穏やかな一二を拾ふと次の如くである。「僕は妬かれる覚えはない。」「妬くならば妬いてもいいよ。」「寧ろ妬かれて見たいよ。」

昭和十年二月十一日発行の『チノキ』第十七冊所載。題は「紙上ハイキング」。筆者名は乳樹探訪記者 古美北吉。被探訪者は巽氏の他に歌見誠一、真田亀久代、与田準一、藤井樹郎、吉川孝一、米山愛紫、吉川行雄氏など。もちろん創作記事だが、筆が軽妙でシャレっていて、被探訪者の身辺躍如たるものがある。こうした文章も新美君の一面を語るもので、全集には収めて貰いたい気がする。

西武線新井葉師駅附近の喫茶店や居酒屋によく連れだつて入つた。何ということもなく話を交わしているのが楽しかつた。彼は外語に通つており、私は下宿住まいをしたり新聞配達をしたりの放浪だつた。いろいろ話をした筈だが、今は殆ど内容について記憶がない。或いは二人とも、並ん

でいるだけで殆ど喋らなかつたのだつたかも知れない。ただある時、彼の方から質問のかたちで、短歌のことについて触れた。彼は童話や童謡で、短歌は作つていなかった。

私の受け応えを聞いていたが「窮屈だとは思わなにかね」と一言いつた。感心したような顔で聞いていた癖に、妙なことを言うそう思つたことだけが、今に判つきり記憶に残つている。新美君の創作の中に短歌は無かつたのだらうか（「上高田時代のこと」「新美南吉研究」第一号『新美南吉全集日記I』付録に所収、昭和四十年九月五日発行）

宮柁二と新美南吉が巽聖歌の家に入り浸りで、実に楽しく付き合つていたことが分かる。まさに二人は、青春を謳歌していたと言つてもよいだらう。

宮柁二は、この文章で新美南吉が書いた「紙上ハイキング」を紹介しているが、私がかつて驚いたのは、宮柁二が昭和十年に出されたこの雑誌を戦中戦後の三十年間ずっと手元に置いていたことである。命と生活を守るのに必死な時代を乗り越えて、この雑誌が残つたことはやはり驚きである。そして、その内容を記憶に留めていて、このように新美南吉の文章を披露して、その才を明らかにしているところに、宮柁二がいかに新美南吉を評価していたかが分かるというものである。宮柁二は、この「紙上ハイキング」について、「こうした文章も新美君の一面を語るもので、全集には収めて貰いたい気がする。」と書いているが、この「新美南吉研究」第八号（『新美南吉全集詩集』付録に所収、昭和四十年十一月二十八日発行）に全文が掲載されている。この南吉の文章の収

録については、「編集メモ」で異聖歌はこんなことを書いて
いる。

南吉の戯文は、わたしは埋没させるつもりでいたけれど
も、そんなものでも「おもしろい」という人が多いので、
これもここに収録。

「おもしろい」という人の一人が宮柁二だったのである。
宮柁二と新美南吉の交流の親密さが充分に窺われる文章で
ある。ただ、この柁二の文章で、気になる箇所がある。

その一つが、最後の段落で、短歌に関わる内容が記されて
いるのだが、新美南吉が「窮屈だとは思わなにかね」と一
言いった。ことについて、「感心したような顔で聞いていた
癖に、妙なことを言うと思うことだけが、今に判つき
り記憶に残っている。新美君の創作の中に短歌は無かったの
だろうか。」と書いている箇所である。実際のところは、新
美南吉の短歌作品は、小学生時代から亡くなるまでに四百首
以上あることが分かっている。つまり、南吉は宮柁二には、
自分がかつて短歌を作っていたことを明かしていなかったの
である。南吉がなぜ短歌を作っていたことを宮柁二に明かさ
なかったかについては、今のところ、私には判断するものが
ない。南吉の作った短歌の全貌が分かるのは、『校訂 新美
南吉全集』の刊行まで待たなくてはいけないが、ひよつとし
たら、宮柁二は、この全集を読んでいたかもしれない。読ん
でどんな感想を持ったか知りたところだが、もちろんこれ
はすべて詮無いことである。

さて、もう一つ私が気になったのは、南吉が「窮屈だとは

思わなにかね」と言いながらも、その後赴任した安城女子高
等学校の教員時代には、短歌を作っていることである。「窮
屈だとは思わなにかね」と言っておきながら、短歌を作っ
ているのは、明らかに矛盾であるが、多分、南吉のおかれた立
場からすると、教員時代の行事に関わる内容を表現するには、
その「窮屈」なことが、逆に作りやすかったのかもしれない。
つまり、もう自由に自分の思いを述べることに、自己規制せ
ざるをえない雰囲気がこの時代には漂いはじめていたので
なからうか。それならば、短歌という定型短詩のほうが無難
であるという判断が、南吉にはあったのではと思われる。

南吉の詠んだ歌を紹介したい。「自転車紀行」と題された
一連二十八首から。

秋陽さす三河の路に輪をつらね遠乗り行かす
少女らと吾と

草がくり草喰みい鳴く仔の山羊のやさしき音
をしまねぶ少女らハも

遠ゆく輪をなめてゆく少女らの脛うつ風
の軽し秋風

かけ渡す矢作の河の高橋を少女らがわたれば
裳ぞひるがへる

玉裳なす噴き上げみづのかぎろひのおりつく
なべに白鳥ハ一つ

谷あいの石切場にハ人気なししみみにいなく
その秋蟬

吾が前に氷をかまぬ少女らハ羞しむらしも吾

が若ければ
石とるとやはぎの河に入りたたしもすそひぢ
たる乙女ごハよし
篁にひるのかそけき風呂たててひとりし入れ
バ心たらへり
目に追ひししじみ蝶々ハウせにけり昼篁の外
の明るさ

〔校訂 新美南吉全集 第八巻〕

全集に掲載されている二十八首は、自筆原稿を底本としている。冒頭に「自転車紀行」の表題がつけられていて、最後の四首については、「篁」という別題がつけられている。

この自筆原稿が印刷物になることはなかった。ただ南吉は、一九三八年九月二〇日発行の「安城高女学報」昭和十三年度第二学期の号に「滝山寺自転車行」と題する短い文章を書いている。この文章によると、この年の八月十五日、安城高等女学校の教員・生徒たちの自転車による吟行会が行われたのである。だから、ここに挙げた歌は、その吟行会での作品ということになるのであろう。

一首一首の完成度が高いことは明らかである。潑刺とした女子高生の姿が見事に浮かびあがってくる。不穏な空気が漂う時代であるのだが、そういう雰囲気を感じさせない。多分短歌という表現形式だからこそ、このように女子高生の潑刺とした姿を詠みきることができたのではなからうか。

佐藤通雅は、前回紹介した「新美南吉記念館 研究紀要」第二十九号に掲載した「再読・新美南吉 7 短詩型文学の

世界」において、次のように南吉のこれらの短歌作品について、述べている。

これらを見ても、短歌としての骨格はすでに修得されていることがわかる。したがって、もしこの表現手段に自分を賭けることがあったなら、相当の歌人になったことはまちがいない。

もちろん、南吉は短歌という表現手段に賭けることはなかった。童話作者としての道を選びとっていった。このあたりのことについて、佐藤は、宮柊二と比べて、次のように述べている。

他方、南吉は力を注ぎさえすれば、かなりの短歌を作ることが可能だった。だがその方向をとらなかつたのは、十分な時間がなかつたばかりでなく、児童文学へ親和する回路が潜在していたからだ。

「窮屈ではないか」と言いながらも、これだけの短歌を作った。しかし、その後は、短歌を作ることとはほとんどなく、病と闘いながら童話作りに専念した。歌人としての新美南吉という可能性も決してなかつたわけではないが、南吉にとって、童話はどうして手放すことのできない文学として存在したのである。

かつて異聖歌の自宅などで青春を共有した二人の若き文学の徒が、それぞれの分野で文学の歴史に残る優れた作品を残したことを改めて感慨深く思う。このような考察を書くきっかけを作っていた佐藤通雅氏への感謝を述べてこの稿を終えたい。